

「おばあちゃん！ バナナ取ってきてー」と大きな声で呼ばれた。

私は、彼女に聞けるところまで笑みながら、

いつも彼女は、何が耳がある時は、大きな声で私を「おばあちゃん」と呼んだ。彼女は特別養護老人ホームで生活している食欲が人一倍多い八十年代、女性だ。

私はそこで介護士として働いていた。この業界に入って早五年程だ。最初のきっかけは、ただなとなく、人助けができればいいかな、とそんな些細な理由だったが、こんな単純な発想で「なんにも足りなくなる」とは思わなかった。

小柄な私が、ちびっこの走りまわる様子を見て、「おばあちゃん、おはようー」と声をかけてくれた。そして、今の職場で「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。

「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。そして、今の職場で「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。

「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。そして、今の職場で「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。

「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。そして、今の職場で「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。

「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。そして、今の職場で「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。

「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。そして、今の職場で「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。

「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。そして、今の職場で「おばあちゃん、おはようー」とのちやん、海苔の佃煮持ってきてー」と声をかけてくれた。

介護の仕事

山梨県 有田 恵

私はいま、介護施設で働いて丸三年を迎えた。

私の祖母は私が小学生の頃、脳梗塞を患い病院へ入院し、その後介護施設で暮らしていた。祖母に会いに行けたのは一年に数回だったが、家族四人で祖母のお見舞いに行くに必ず「よく来てくれたね」と泣いていた。祖母の部屋で話をしたあとは、いつも近くにある 100 円ショップで祖母と一緒に買い物をするのが恒例だった。祖母の乗る車いすを押し、店内を歩いているといつも祖母は「アメを買っておくれ」と言う。糖尿病も患っていた祖母だったが、なによりアメを買うのを楽しんでいた。毎回一袋と決め買い物をしていた。施設に戻り祖母は私たち家族にアメを配り、そして一粒アメを頬張る祖母の顔はとても嬉しそう、穏やかだったのを今でも覚えている。

私は中学生に上がり勉強や部活などで忙しくなり、なかなか祖母に会いに行く機会が減っていた。そんな中、姉が成人式を迎え、振り袖姿を祖母に見せに行くことになった。私も一緒について行き久しぶりに祖母に会うと、私たちのことを忘れてしまったのか「どのお嬢さんで？」と言った。中学生だった私にとってはとても悲しかった。その後話をしていると祖母も私たちのことを思い出したのか和やかに昔の話をしていて、私の心の中では祖母は私たちを忘れてしまったのだ、と祖母のことが怖くなってしまった。

高校生に上がった私は興味本位で福祉を学び、在学中にヘルパー2級を取れたので卒業後は特別養護老人ホーム併設のデイサービスで務めた。はじめのころは何をしていいか、利用者様と何を話していいかわからず、介護職に就いてよかったのかと考える日々が続いた。しかし周りの職員の方の指導や応援があり日々の業務に慣れ、デイサービスを利用する利用者さんと楽しく過ごしていた。

私も成人を迎え、祖母のいる施設へ行った。部屋のベッドの上には私が知っている祖母より一回りも二回りも小さくなった祖母が寝ていた。祖母の前へ行き、「おばあちゃん」と声をかけた祖母の目がかすかに開いた。「おばあちゃん、今日成人式だったんだよ」と話しかけるとより目を開け私を見てくれた。祖母は何も言わなかったが、その時の祖母の柔らかい表情を今でも覚えている。

介護の仕事をする前は、私たちのことを忘れていく祖母のことが怖いと感じていたが、今ではあのころの気持ちがあんなに思えるほど利用者さんと過ごす毎日が楽しく、介護の仕事を通して、利用者さんの介助や介護はもちろんのこと何をしたら喜んでもらえるか、何をしたら楽しいかと思ってもらえるかを一番に考えていくことが大切だと感じた。これからは「利用者さんの笑顔のために頑張ろう」と。

私の祖母は天国へ行ってしまったが、施設にいる利用者さんが私にとっては大切なおじいちゃん・おばあちゃんだ。